望月　長唄　全詞章

原典に「杵屋正次郎曲」とあるのみ　作詞者・初演年不詳　能『望月』による獅子物

夫れ白雲峰を覆ひ、青巌聳えし山頭より、漲り落つる清泉の、谺に響く水の音、心耳を澄ます
幽谷に
今を盛りと咲き満ちし、牡丹の花の香を慕ひ、戯れ遊ぶ猛獣の、姿を写す谷川や
峰を仰げば千丈の、雲より落つる瀧の糸、巖に眠る荒獅子も、牡丹に心和らぎて、倶に狂ふぞ
面白き
吉野龍田の花紅葉、更級越路の月雪
眺め明石の浦舟も、風のまにまに真帆片帆、磯の千鳥と海松布の関を、小淘綾の橋田子の浦、
富士の煙の絶間なく、つれなき人を松島や、天の橋立切戸の文殊、きれとは嬉しき名所かな
〔舞〕　妙なりや
獅子虎轉は時を知る、雨村雲や奏すらん
〔雷序〕〔獅子舞〕　あまりに秘曲の面白さに、なほなほ巡る盃も、舞も進めばいとど尚、眠りも
来る計りなり
ものものしやと立ちかかる
獅子虎轉の舞楽のみぎん、たいきんりきんの獅子頭、打てや打てや、又は八つ撥
撥を打てやと引寄する
獅子の座にこそ直りけれ